

『シリーズ田園回帰5 ローカルに生きる ソーシャルに働く —新しい仕事を創る若者たち』

松永桂子, 尾野寛明編著

農業・農村領域 主任研究官 小柴有理江

本書は、「田園回帰」シリーズの第5巻であり、地域での仕事おこしや働き方に焦点を当てた巻となっています。ただし、いわゆる起業や地域づくりの指南書ではなく、地域で実際に起業したり、そのサポートを行っている実践者が自ら記した文章の掲載を中心として、その体験や思いを描出することに重きを置いています。そうしたことを通じて、「田園回帰」した若者の今日的な価値観や職業観を掘り下げ、地域における「個」の存在や「公」のあり方を問い直すことを意図しています。

本書は4部構成になっています。まず、序章では、若者の「ローカル志向」の今日的な特徴について、編者が試論的に解説を行っています。都市から地方へ向かう若者が増加する背景として、①地域課題にコミットしたい個人の存在、②IT技術の進歩等による都市と農村のフラット化、これに加えて③「クリエイティブ・クラス」に象徴されるような、必ずしも大企業志向でない、個人ベースのなりわいづくりのムーブメントがあることに注目しています。とりわけ3点目に関しては、評者の理解ですが、農山村での暮らしを自身のクリエイティビティを高める場として積極的に評価し、それが移住や「継業」につながり、オリジナリティを高めた強固な「個」が形成され、個人同士や「公」との新たな関係を構築しつつあることを示唆しているように捉えられます。

次に第I部では、大学の建築系の研究室による取組を紹介しています。研究室が手がける古民家再生プロジェクトを紹介しつつ、そこで育まれた学生の職業観や卒業生の起業事例も紹介されています。経済成長を知らない20代、30代の若者が、大企業で働くことをキャリアの面で一種のリスクと捉え、自ら手の届く範囲で完結する仕事を堅実に起こそうとしていることが印象的です。

第II部では、地域づくり活動を行う若者を支援する中間支援組織の活動に焦点を当てています。鳥根県で活動するNPOの事例を取り上げ、状況に応じて変化していく活動のプロセスや行政との関係性に

ついても詳しく述べられています。

第III部は、ソーシャルビジネスや地域に根

ざした産業にかかわる領域での起業家個人を取り上げています。廃校を利用した書店兼カフェ、若者の自立支援を行う山村シェアハウス、東日本大震災の被災地における手仕事を生かした仕事おこし、自然放牧を行う酪農といったような取組が幅広く取り上げられています。いずれも起業に際する思いやビジネスの実際、地域とのかかわりについて、起業者自らの言葉で率直に綴られています。編者の解説にもあるように、こうした人々はすべてを地域に捧げるのではなく、第一に技術やビジネスをベースとした個の存在があり、それを応用して地域とのかかわりを作っていくという流れが特徴です。そうであるからこそ、「選ぶ地域」と表現されるように、受け入れる地域側もどんな人に入ってきてほしいか、地域のビジョンを持つことが今後ますます重要になると考えられます。

第IV部では、住民や起業家が集まるコミュニティの場づくりに焦点を当てています。徳島県のサテライトオフィスのような農山村での動きに加え、都市部でも同様の動きがあることを紹介し、こうした取組が普遍性を帯びていることを示唆しています。

終章は、自らも鳥根県でネット古書店を営む編者によって締めくくられています。「ローカル志向」の若者たちは、地域の人々の役に立ちたいとの純粋な思いで、本業に加えて、地域の活動に取り組んでおり、それゆえに、都市との対抗でない、無理をしない地域づくりが必要であると強調しています。

このように本書は、実践者の「生の声」に触れることで田園回帰の本質に迫ろうとしています。現段階では、個別の取組について「安易な類型化は避ける」としているため、本書は様々な論点を含んでいますが、それが個人ベースでの田園回帰の多様性を表しており、今後のさらなる事実の積み上げにも期待が集まるものと思います。



『シリーズ田園回帰5
ローカルに生きる
ソーシャルに働く
—新しい仕事を創る若者たち』
編著者／松永桂子, 尾野寛明
出版年／2016
発行所／農山漁村文化協会